広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	同音語の共通要素 : 生活名彙を中心にして
Author(s)	十河, 直樹
Citation	ニダバ , 24 : 151 - 154
Issue Date	1995-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047966
Right	
Relation	

研究ノート

同音語の共通要素

― 生活名彙を中心にして ―

十　河　直　樹

1．はじめに

同音語を同音異義語ともいいます。カキと言っても「牡蠣」、「柿」、「火気」なのかは、要領を得ません。こういった事は日常茶飯事の事です。ただ、話の前後で自分なりに判断している場合が多いようです。したがって、「無情」と「無常」などの誤解があります。同音であってアクセントが同様である訳ではないようです。

これは、日本語の長点であり、欠点でしょう。

①漢字の音訓　②造語　③和語の五十音（清音、濁音、半濁音、拗音、撥音）④アクセント　⑤方言などにその要素が内包されていると考えられます。

つまり

話を逆に発想して、牡蠣という海産物や、木になる柿に対して、なぜ「カキ」と呼ぶようになったかと言うことです。牡蠣と柿を比べて似ている点はありません。アクセントと表記（漢字）が違うようで、この異なる要素の物、ことがらの表現を、なぜ同音で表現するようになったのか。それは単なる偶然なのか。それとも、ある一定の法則というか、約束、基準というようなものでなされたものか。研究途上一端を述べてみたいと思います。

2．音と要素との関係

（1）言葉は事柄の端です。ですから事柄が説明、解明できれば、別に問題はない訳ですが。それは、事柄を主体にした考え方であって、言葉を研究する側からみれば無理というか、不都合な事が多々生じるとおもいます。

1、本来、言葉は事柄を説明、解説する役目の音声の基準だった符合。

2、従って、時代や、地域、年層、性別等で変化のあることは当然の事です。

3、その変化、改造された言語の形態を解析することは、元の言語形態を明確に、細密に捕らえて解析する必要があります。古語の解析ですが、しかし、この研究にも、音声言語には限界があります。表記の点でも、あいまいさがあります。「てふてふ

」と表記して「ちょうちょ」と音読させる一点をみてもうなずけましょう。

4、別の観点から、漢字の渡来で、音読、訓読と、湯桶読みと、重箱読みと言った点。それに、当て字読みといった独特の技法があります。

（2）本来、言葉は、社会の便宜上に用いられた符合で、記上の諸点らもつれた現象で、さらに複雑化され、取捨選択され、洗練されて今日の現代用語が造形されているといってよいでしょう。

（3）しかし、動かされない一点があります。それが要素だといっていいと思います。

1．カキという音形に対して、牡蠣、柿、火気、花器、夏期などという用語が暗示できますが、文言の前後で理解でき、しかも話が一つのテーマに従っての話方であれば、それもさしたる問題ありません。しかし、それは日本人の日常の訓練と、生活組織化によるところです。

2．カキという音声が同音でも、牡蠣と柿は本質的に違います。しかし、やはり同素です。

3．ここでは、この点「同音異義同素語」を問題にしたいのです。

3．実例

◆ 一音の場合

● ラ の場合

（1）羅生門、閻魔＝閻羅、埒、拉致、羅針盤などは、ラという音が接頭語にありますが。これらの用字と使用される方面はまったく関係ありません。しかし、要素の点で、ラという音は共通しています。

（2）羅生門も閻羅、拉致、埒、羅針盤も、ある一定の域の限界を意味しています。
羅生門は、門でもある領地の端にある門。拉致は、（いきたくない者を）無理に引き取って、連れていく。埒は、物事のくぎり。＝限り。羅針盤は、無限の域を推し測る（計具）。

リ の場合

（2）すり（掏摸）、刳り、栗、霧、無理、鳥などは、その形態が丸い。または、丸くなったよう。
掏摸は、物に添って（奪い取る）。刳りは、物を（道具を用いて）捲るように開ける。栗は、楕円形に似た形態。霧は、方丈で、一滴の水は玉状をなしている。無理は、理が縺れ、絡んで（団子状）で、円形状態。鳥は、巣に居る状態は、や

はり楕円形。

モの場合

（2）藻、門、桃、黐、漏れる、餅、腿などは、もつれあった一塊のもの。

藻は、水中では糸状で、波に揺れて絡んでいる。門は、上空から見ると、人が出入りしている状態が、やはり糸のもつれた状態にみえる。黐、餅は、その固体を二つに割って引くと、数本の糸状をみせる。桃、腿は、モが元の形態で、桃を食べと、種から果肉が糸状になっている。その重音が桃で、腿は、桃の種が二つに割れる点と、身体（女性）の、腿とを掛けたもの。

◆ 二音の場合

カキの場合

（2）牡蠣、柿、火気、花器、夏期などは、堅いもので覆われています。

牡蠣も柿も、表皮が「固い皮で覆われている」という点。他の火気、花器、夏期は、造語で、カとキの合成語。

キリの場合

（2）霧、桐、錐は、方丈、円筒状の形態になっている現象に指示した呼名。

霧は、「霧を吹く」「霧がたちのぼる」と言うように方丈。桐は、立木の形態を遠視すれば分かるように、三角形の方丈をなしている。錐は、その刃の形態が、やはり三角形状をなしている。

ウミの場合

（2）海、膿は、本来動詞の連用形（名詞）の形態をとっている。ウムが原形で、ウという音には、意味が無い。ミに意味があって、本体、実態を意味します。

ボウ、ホウの場合

（2）傍示、防波堤、坊主、暴風雨、暴動、帽子、墓穴などは、ものの、物事の終止。または、果てを意味しています。

傍示は、行政管轄地域の先端地域。防波堤は、守るべき海域の先端の堤。坊主は死人と健常者（生人）との境を司る、先端の人間。暴風雨は、嵐の最高の状態。暴動は、人間の秩序を乱し、荒れ狂った状態。帽子は、頭部の先端（頭頂部）を覆う袋状の物。墓穴は、穴の種類の内でも、最終、末端の穴。で、ボという音はホの裏面の要素をもっているようです。

◆ 三音の場合

カワラの場合

（2）瓦、河原、川原は、カワ／ハラで川（皮）・原（腹）などの要素を持ちます。
すなわち、ワの音とハの音とが衝突してワの一音に融合音と化した現象です。

4．実例から（むすびにかえて）

1．日本語は、音形から、五十音あるものの、音形態要素からみて、一音節、二音節までで、三音節以上はあってもまれでしょう。

2．形態要素というものは、カという音を無数に分化して、カミ、カサ、カタチ、カントウ、カタナ、チカン、カリンというように、なぞらえ、固定化させ、名詞と定めたものを一語としたものと思われます。つまりカの要素は、それぞれの単語の中に生きていて、漢字の導入と融合して、紙、傘、笠、形、関東、刀、痴漢、花梨というように表示したものと思われます。

3．この、音形態要素は、音形の五十音もなく、清音数の何パーセントかの領域を責めるに至り、撥音、拗音、濁音は、本来中国音に疑似した音形と判断します。